

外国人留学生の送り仮名分析

井 上 次 夫

(2021 年 9 月 27 日受付, 2021 年 12 月 15 日受理)

Analysis on International Students' Use of Okurigana

Tsugio INOUE

(Received : September 27, 2021, Accepted : December 15, 2021)

要 旨

従来, 内閣告示「送り仮名の付け方」(1973)に基づく日本人学生を対象とする送り仮名の定着状況に関する調査や論考は行われているが, 外国人留学生を対象とするものはほとんど見られない。

そこで, 本稿では外国人留学生を対象に送り仮名の付け方状況について調査, 分析を行った。その結果, 以下の点が明らかとなった。(1) 送り仮名の正答率は日本人学生の 7 割弱であること, (2) 漢字使用地域出身の留学生の正答率が相対的に高いこと, (3) 送り仮名能力は個人差が大きいものの, 日本語能力レベル (JLPT 認定級) と相関があること, (4) 現行「送り仮名の付け方」の「通則」別の正答率には日本人学生と同様の傾向が窺われること等である。また, 送り仮名の誤答分析を通して, 現行「送り仮名の付け方」を知らない場合や送り仮名の付け方に困った場合の対処法として, 直観方式のほか, 過剰般化, 経済性, 音節数, 類推といった 4 種の送り仮名ストラテジーが存在することを指摘し, 外国人留学生に見られる誤った送り仮名の付け方の生成メカニズムを明らかにした。

キーワード: 送り仮名の付け方, 外国人留学生, 送り仮名能力, 誤答分析, 送り仮名ストラテジー

Abstract

While there has been discussion concerning Japanese students' use of declensional kana endings based upon the *Use of Declensional Kana Endings* Cabinet Announcement, such discussion regarding international students has been scant. In this regard, this paper surveyed and analyzed how international students use okurigana. The results indicate the following :

- (1) International students provided 70% fewer correct answers compared to Japanese students.
- (2) The ratio of correct answers was relatively high among students from countries where Chinese characters are used.
- (3) The ability to use okurigana varied greatly from person to person, and it was correlated with the students' Japanese-language proficiency level (JLPT certification levels).
- (4) The percentage of correct answers among international students for each grammatical rule is similar to that of Japanese students.

In addition, this paper also analyzed incorrect answers provided by international students. When they did not know how to use okurigana in certain situations or when they were confused, they used the following methods (similar to Japanese students) : overgeneralization, economy, syllable and analogical inference strategy. There were some aspects unique to international students regarding these methods.

Keywords: use of declensional kana endings, international students, ability to use okurigana, analysis of wrong answers, okurigana strategy

1. はじめに

1973年6月の内閣告示「送り仮名の付け方」(以下、告示「送り仮名の付け方」と記す。)は、既に半世紀有余の歴史がある^{注1}。この送り仮名法は、国語科教育において重要な指導事項の一つであるとともに、日本語教育においても必要な指導事項の一つである。しかし、日本語教育においては送り仮名の指導以上に漢字や語彙の指導に重点が置かれている。この背景には、告示「送り仮名の付け方」の「通則」にはいずれも「本則」以外に「例外」又は「許容」が加えられており「付け方」という点では煩雑であること、日本語学習者である外国人留学生(以下、留学生と記す。)にとっては送り仮名の付け方が試験に出題されないこと、送り仮名の付け方の誤りが特に問題視されないこと等があると思われる。その結果、留学生の送り仮名の付け方の状況や誤りの実態が明らかでない状況なのである。

そこで、本稿は、告示「送り仮名の付け方」に関する留学生の知識・能力の状況、実態はどのようなものであるか、留学生の送り仮名の付け方や誤りには何か特徴があるのか、あるとすればどのようなものであるかを調査、分析し、留学生の送り仮名の付け方を明らかにする。

2. 先行研究

井上(2003a)は、留学生と日本人学生の送り仮名の付け方の能力を明らかにするために、留学生26人(中国22人・韓国4人)と日本人学生276人(高校生121人・高専生155人)を対象に告示「送り仮名の付け方」に関するテスト(以下、送り仮名テストと記す。)を実施している。

ここでは、送り仮名の付け方の能力に関する下記の2つの仮説を立て、「漢字と送り仮名」問題(日本漢字能力検定協会『2・準2・3・4級正答率調査(平成12・13年度)』)において正答率が低かった52問の追試を行い、留学生と日本人学生の送り仮名能力、特徴的な送り仮名の付け方を分析する。

(仮説1) 送り仮名の付け方の能力は、日本人学生のほうが留学生より優れている。

(仮説2) 送り仮名の付け方の誤りには、(Ⅰ)日本人学生と留学生に共通の誤りがある。

(Ⅱ)日本人学生に特徴的な誤りがある。(Ⅲ)留学生に特徴的な誤りがある。

そして、送り仮名テストの正答率を基に、易しい送り仮名の語(正答率70%以上)、難しい送り仮名の語(正答率50%未満)を対象に、A「日本人学生・留学生ともに易しい」、B「日本人学生・留学生ともに難しい」、C「日本人学生に易しく、留学生に難しい」、D「日本人学生に難しく、留学生に易しい」の4つに分類し、結果を語例とともに示している(表1)。

表1 送り仮名の付け方の難易による4分類

送り仮名の付け方の難易	語例
A 日本人学生・留学生ともに易しい	供える, 寂れる, 短い, 悔しい, 厳かだ, 安らかだ
B 日本人学生・留学生ともに難しい	覆す, 陥れる, 卑しめる, 懐かしい, 懇ろだ
C 日本人学生に易しく, 留学生に難しい	絶やす, 反らす, 散らかる, 狂おしい, 後ろ, 誉れ
D 日本人学生に難しく, 留学生に易しい	該当語なし

そして、表1のB「日本人学生・留学生ともに難しい」に該当する送り仮名の付け方の語の要因について次の3点から説明を行っている。

- ①「漢字訓多音節」語（＝漢字の訓が4音節以上。以下、当該部分に下線。）

例：覆す [4音節]，陥れる [4音節]

- ②派生語（＝派生関係のある語。「送り仮名の付け方」通則2・本則）

例：卑しめる [卑しい]，懐かしい [懐く]

- ③告示「送り仮名の付け方」内の「例外」語

例：懇ろだ [単独の語，通則1・例外(3)]

また、表1のC「日本人学生に易しく、留学生に難しい」に該当する送り仮名の付け方の語の要因については次の3点から説明している。

- ①自他対応語（＝自他対応のある語。「送り仮名の付け方」通則2・本則）

例：絶やす [絶える]，反らす [反る・反れる]

- ②派生語（＝派生関係のある語。「送り仮名の付け方」通則2・本則）

例：散らかる [散る]，狂おしい [狂う]

- ③告示「送り仮名の付け方」内の「例外」語（＝単独の語，通則3・例外(1)）

例：後ろ，誉れ

いま、上記B及びCの説明で挙げられたそれぞれの要因について日本人学生の場合からみると、送り仮名の付け方は、B①「漢字訓多音節」語が難しく、C①「自他対応」語は易しい。しかし、派生語においては難しい語と易しい語（B②・C②）が混在する。また、「送り仮名の付け方」の「例外」語においても難しい語と易しい語（B③・C③）が混在する。このため、派生語や「送り仮名の付け方」の「例外」語におけるそういった送り仮名の付け方の難易の差はどこから生じるのかが新たに問題となり、この点についてはさらに分析の必要があるといえる。

一方、留学生の場合には、送り仮名の付け方は、B①「漢字訓多音節」語、C①「自他対応」語、B②・C②派生語、B③・C③「送り仮名の付け方」の「例外」語のいずれもが難しい。ただし、井上（2003a）によれば、調査対象52語の中には留学生にとって未習語が多く含まれていたという。このことからすれば、今後、未習・未知の語（非理解語彙）を対象とした留学生の送り仮名の付け方の状況、またそれらの語に対する送り仮名ストラテジーに関する調査が必要であるといえる。

さて、ここで改めて前掲の仮説1についてみると、送り仮名テストの正答率は日本人学生70.0%、留学生46.5%であった。そして、表1のD「日本人学生に難しく、留学生に易しい」送り仮名の付け方については該当語がなかったため、これらは仮説1を裏付ける根拠となるといえる。一方、仮説2については、(Ⅰ)「日本人学生と留学生に共通の誤り」には表1のBがそれに該当し、(Ⅱ)「日本人学生に特徴的な誤り」には「漢字訓多音節」語が難しく、派生語及び「送り仮名の付け方」の「例外」語では語によって難易の差があるという点が該当する。そして、(Ⅲ)「留学生に特徴的な誤り」には表1のCがそれに該当する。以上のことから、仮説2についても裏付けられたものと考えられる^{注2}。

3. 送り仮名指導と送り仮名調査

3. 1 送り仮名指導

送り仮名とは、日本語の単語を漢字と仮名で表記するときに、語末を仮名書きする場合の仮名の部分という^{注3}。すなわち、一つの語を漢字を用いて表記する際、その漢字の読み方と意味を明らかにするために、漢字の次に添える仮名である。そして、告示「送り仮名の付け方」は、その送り仮名の付け方の「よりどころ」として公布された規則である。

さて、送り仮名の付け方の指導（以下、送り仮名指導と記す。）が行われている国語科教育の場合をみると、「小学校学習指導要領（2017年告示）」は次の指導事項（〔知識及び技能〕(1)ウ）を示している。

第3学年及び第4学年

漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方、改行の仕方を理解して文や文章の中で使うとともに、句読点を適切に打つこと。

第5学年及び第6学年

文や文章の中で漢字と仮名を適切に使い分けるとともに、送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。

そして、教科書においては、例えば『小学校国語3年上』（学校図書、2021）の場合、送り仮名について「漢字と送りがな」の項目を立てて、次のように説明している。

漢字につづくかなの部分を送りがなといいます。

見 — 「見える ほくなら見える」「見せる ほくなら見せる」 もし、「見」の送りがなが、「る」だけだったら、「みる」「みえる」「みせる」の、どのいみか分からなくなってしまいます。送りがなを漢字にそえることで、読み方といみをはっきりさせているのです。（略）読み方がたくさんある漢字は、送りがなによって読み方がきまり、いみもきまります。 細 — 「細い」「細かい」

一方、日本語教育における送り仮名指導については、送り仮名を「面倒な問題」（小泉 1993：359）と捉えたり、告示「送り仮名の付け方」を「例外」や「許容」も多く非常に複雑と指摘した上で「本則（送り仮名の付け方の基本的な法則と考えられるもの）として示されている用法に従う」（石田 2000：203）、「漢字と組み合わせて一つひとつの語として用法とともに覚える」（東海大学留学生教育センター 2005：131）といった指導が行われている。また、石田（同上）によれば、告示「送り仮名の付け方」は「よりどころ」を示すもので、各種の専門分野や個人の表記にまで及ぼそうとするものではなく、日本人でも日常生活では必ずしも「本則」通りに送っているわけではないため、日本語学習者の送り仮名については試験や作文等で間違えていても点数は引かないで訂正するのみにとどめる例が一般的であるという^{注4}。

以上から窺われる日本語教育での送り仮名指導の在り方が、井上（2003a）の送り仮名テストにおける留学生の正答率が基本的な語では高率（例：悔しい 96.2%，必ず 88.5%，納める 80.8%）であったのに対し、全体平均では 46.5% と低調であった背景の一つにあると思われる。なお、島田（1992）は、外国人、主に中国人学習者に対する文章作成の指導経験を通して「誤字脱字が多く、特に漢字と仮名の使い方である送り仮名の付け方については、体系をもったまともな指導をうけていない事実気付かされた」という。

そして、このことから、簡明で系統的な送り仮名法としての告示「送り仮名の付け方」は日本語教育における必修項目であると述べている。

3. 2 「送り仮名の付け方」調査

留学生の送り仮名の付け方の知識・能力に関する調査や論考は、管見の限り、井上（2003a）以降では留学生を対象とした送り仮名タスクの実践報告（柳田 2013）が見受けられる程度である。そこで、本稿は、留学生の送り仮名の付け方の現状・実態及びその特徴について明らかにすることを目的として、留学生 51 人を対象とする「送り仮名の付け方」調査（以下、送り仮名調査と記す。）を新たに実施した。

3. 2. 1 調査の概要

(1) 調査時期 2018 年 8 月～9 月

(2) 被調査者 留学生 51 人（高知大学 47 人・高知県立大学 4 人）

・出身＝中国 28 人，台湾 7 人，韓国 7 人，スウェーデン 4 人，その他 5 人（アメリカ，イラン，インドネシア，タイ，ロシアの各 1 人）

・日本語能力試験（JLPT）＝ N1：19 人，N2：14 人，N3：14 人，不明 4 人

(3) 調査語 32 語

失う，冷やかす，目覚ましい，勇ましい，浴びせる，確かめる，散らかる，冷ます，喜ぶ，混じる，退く，戦う，志す，豊かな，耕す，争う，満ちる，絶やす，改める，連なる，逆らう，慣らす，快い，照らす，満たす，過ごす，比べる，養う，導く，果たす，断る，変わる

(4) 調査方法

平仮名の語と使用する漢字を示し，次の質問形式により語の表記を求める。（20 分間）

問 次の例のように，与えられたことばを，漢字とひらがなを使って書いてください。

（例） きる 切 → 切る

3. 2. 2 結果の概要

留学生の送り仮名の付け方の正答率を，日本人学生（高専生）における同調査の正答率，両者の差とともに表 2 に示す^{注5}。留学生全体の正答率は 55.5%，高専生は 83.7% で，その差は 28.2 ポイントであった。また，留学生は，最大値 29 点（90.6%），最小値 7 点（21.9%），中央値 17 点（53.1%）であった。これに対し，高専生は最大値 32 点（100%），最小値 17 点（53.1%），中央値 28 点（87.5%）であり，いずれも留学生を上回っている（井上（2003a）仮説 1）。

しかし，調査語を個別にみていくと，いくつかの留意すべき点がある。例えば，表 2 の 31「断る」では，留学生の正答率が高専生の正答率を 3.4 ポイントながらも上回っており，先の仮説 1 への反例となっている。この原因として，今回の送り仮名調査では告示「送り仮名の付け方」通則 1 の本則に従い「断る」を正答とし，通則 1 の許容の「断わる」を誤答として処理している影響が考えられる点で，なお検討の余地がある。また，5「浴びせる」，7「散らかる」，22「慣らす」，25「満たす」等では留学生と高専生の正答率の差が 50 ポイント以上と非常に大きいのに対し，9「喜ぶ」，12「戦う」，19「改める」，27「比べる」等では差が 10 ポイント以下と小さい点についても，今後，さらに検討する必要がある。

表2 調査語別の正答率(%)

調査語		留学生	高専生	差	調査語		留学生	高専生	差
1	失う	82.4	95.7	- 13.3	18	絶やす	45.1	90.3	- 45.2
2	冷やかす	17.6	47.3	- 29.7	19	改める	84.3	93.5	- 9.2
3	目覚ましい	37.3	72.0	- 34.7	20	連なる	56.9	94.6	- 37.7
4	勇ましい	39.2	61.0	- 21.8	21	逆らう	21.6	49.5	- 27.9
5	浴びせる	9.8	68.8	- 59.0	22	慣らす	35.3	89.2	- 53.9
6	確かめる	19.6	50.5	- 30.9	23	快い	64.7	76.3	- 11.6
7	散らかる	23.5	76.3	- 52.8	24	照らす	45.1	87.1	- 42.0
8	冷ます	51.0	87.1	- 36.1	25	満たす	41.2	93.5	- 52.3
9	喜ぶ	92.2	98.9	- 6.7	26	過ごす	35.3	81.7	- 46.4
10	混じる	64.7	88.2	- 23.5	27	比べる	92.2	97.8	- 5.6
11	退く	68.6	95.7	- 27.1	28	養う	78.4	95.7	- 17.3
12	戦う	94.1	97.8	- 3.7	29	導く	80.4	96.8	- 16.4
13	志す	64.7	94.6	- 29.9	30	果たす	31.4	80.6	- 49.2
14	豊かな	52.9	82.8	- 29.9	31	断る	76.5	73.1	3.4
15	耕す	60.8	78.5	- 17.7	32	変わる	66.7	95.7	- 29.0
16	争う	86.3	96.8	- 10.5	全体平均		55.5	83.7	- 28.2
17	満ちる	56.9	89.2	- 32.3	(p 値 $< \alpha = 0.05$)				

4. 留学生の送り仮名分析

本章では、留学生の送り仮名調査の結果について S - P 表分析を行う。最初に、被調査者 (Student) の属性として出身、日本語能力レベルの観点から分析する。その後、調査語 (Problem) の属性として告示「送り仮名の付け方」の通則、送り仮名の音節数の観点から分析する。

4. 1 被調査者の属性

被調査者 51 人及び調査語 32 問について作成した S - P 表(「付録」資料 1-1)によると、被調査者番号 34 で得点 20 の台湾出身留学生(㉔台湾 20 と記す。以下、同じ。)は、S 曲線の左側が正答 12、誤答 8、右側が正答 8、誤答 4 である。すなわち、易しい問題よりも難しい問題のほうがよくできていることから、この被調査者には何らかの問題があると考えられる。同様に、㉔タイ 17 においても、S 曲線の左側が正答 11、誤答 6、右側が正答 6、誤答 9 であり、易しい問題に対する誤答数、難しい問題に対する正答数ともにその多さが目立つ。これは、㉔スウェーデン 14、㉔アメリカ 13 を始めとする正答率の順位が 44 位の㉔韓国 11 から最下位㉔スウェーデン 7 までの被調査者 8 人に共通する傾向である。これらの問題を有すると考えられる被調査者については、その原因を分析する必要がある。

そこで、ここではまず、被調査者の属性である出身に着目し、出身別の正答率を調査した結果を表 3 の左、そして、右には左表内の「その他 5 人」の内訳を示す。

表3 出身別の正答率（％）

	正答率	中央値	最高値	最低値	人数
中国	63.8	62.5	90.6	31.3	28 人
台湾	57.2	46.9	90.6	34.4	7 人
スウェーデン	42.2	37.6	71.9	21.9	4 人
韓国	34.4	34.4	46.9	25.0	7 人
その他	46.3	46.9	62.5	28.1	5 人
全体	55.5	53.1	90.6	21.9	51 人

その他	正答率	中央値	最高値	最低値	人数
イラン	62.5	62.5	62.5	62.5	1 人
タイ	53.1	53.1	53.1	53.1	1 人
ロシア	46.9	46.9	46.9	46.9	1 人
アメリカ	40.6	40.6	40.6	40.6	1 人
インドネシア	28.1	28.1	28.1	28.1	1 人

表3によると、正答率は、漢字使用圏の中では中国・台湾出身が60%前後と相対的に高いのに対し、非漢字使用圏のスウェーデン42.2%に次いで韓国が34.4%と低い。その他の5国出身については、イランの62.5%に対し、インドネシアが28.1%と最も低い。そして、最高値、最低値をみると、「出身」属性に関わらず被調査者間の個人差が大きいことが分かる。

次に、被調査者の属性である日本語能力に着目し、日本語能力（JLPT 認定級）別の正答率を表4に示す。表4によると、日本語能力のレベルが高くなるほど送り仮名の能力も高いことが分かる。そこで、日本語能力と正答率の相関を調査すると、両者には相関（ $r = 0.62$ ）がみられた。また、表4からは、N2（60.6%）とN3（40.3%）の正答率の間に大きな較差が認められる。これは、読む、聞く、文字・表記、語彙、文法等にわたって日常的な場面に使われる日本語をある程度理解できるレベルのN3と日常的な場面に使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解できるレベルのN2との差によるものと考えられる。一方、最高値、最低値からは、「日本語能力」属性とは関わらず被調査者間の個人差が大きいことが分かる。個人差要因については、複合的な面があると予想されるが^{注6}、いまはこれ以上の言及を行う準備がない。次節では、調査語の属性について分析する。

4. 2 調査語の属性

被調査者51人及び調査語32問のS－P表（「付録」資料1-2）によると、調査語番号27で正答人数47の「比べる」（「㉔比べる47」と記す。以下、同じ。）は、P曲線の上側が正答43、誤答4に対し、下側が正答4、誤答0である。すなわち、得点上位者の正答率（91.5%）を得点下位者の正答率（100%）が上回ることから、この調査語「比べる」には何か問題があることが疑われる。一方、「㊥耕す31」ではP曲線の上側が正答21、誤答10であるのに対し、下側が正答10、誤答10であり、得点上位者における誤答数の多さ、得点下位者における正答数の多さが目立つ。なお、この得点下位者における正答数の多さについては「㉑

表4 日本語能力（JLPT 認定級）別の正答率（％）

	正答率	中央値	最高値	最低値	人数
N1	66.9	71.9	90.6	37.5	19 人
N2	60.6	62.5	84.4	34.4	14 人
N3	40.3	40.6	62.5	21.9	14 人
認定なし	35.9	36.0	46.9	25.0	4 人
全体	55.5	53.1	90.6	21.9	51 人

喜ぶ 47」「⑨改める 42」「③断る 39」「②快い 33」等でも同様の傾向が認められるため、この点についてはさらに原因の分析が必要である。

そこで、ここではまず、調査語の属性として、告示「送り仮名の付け方」の通則に着目し、留学生及び日本人学生（高専生）を対象とした通則別の正答率についての調査結果を表5に示す^{注7}。

表5によると、通則1「本則」の正答率（78.4%）が他に比して高いことが分かる。これは、通則1「本則」が送り仮名法の「活用のある語は、活用語尾を送る」という基本理念を示していること、活用のある語のうちから通則2を適用する語を除いているため簡便であること、また、日本語教育における送り仮名指導が基本的に「本則」として示されている用法に従うものであること等から、本則の送り仮名の正答率（定着率）が最も高くなっているものと考えられる。

次に、留学生の正答率は全体的に低く、特に、通則1「例外」(3)の「逆らう」と通則2「本則」(2)「確かめる」ではそれぞれ20%前後と低い。この原因としては、日本語教育における送り仮名指導が漢字指導や語彙指導と比べてそれほど重視されていないことがある。また、送り仮名が「漢字と組み合わせて一つひとつの語として用法とともに覚える」（東海大学留学生教育センター 2005）のような指導が主であることから、例えば「逆」は「逆さ・逆だ」、「確」は「確かだ」として既習漢字であっても語としての「逆らう」「確かめる」は未習である、覚えたとしても忘れていた等の可能性がある。

ところで、井上（2005b）では、高専生119人に告示「送り仮名の付け方」の存在を知っているかを調査している。結果は、「知っている7（5.9%）」「知らない112（94.1%）」であった。よって、おそらく留学生についても告示「送り仮名の付け方」の存在を知る者はほとんどいないものと予想される。そうだとすれば、留学生は何を「よりどころ」として送り仮名を付けているのであろうか。

これに関しては、送り仮名の付け方には次に示す3つの「誤りの音節数ストラテジー（誤ルール）」があるという仮説を提示し、小学校5・6年生148人と高校生45人の計193人を対象に調査を行い、その妥当性を検証している小野寺・中村（1981）が参考になる^{注8}。

(1) II + n 型ストラテジー：漢字に2音節を当て、残りを仮名で送る。

例：冷す、浴る、変る（許容）

(2) II + 2 型ストラテジー：4音節の語の場合のみ、漢字に2音節を当て、残りの2音節を仮名で送る。

例：短かい、失なう、産れる、断わる（許容）、喜こぶ

(3) N + る 型ストラテジー：最後が「る」で終止する語の場合には、その「る」のみを仮名で送る。

例：消る、投る、栄る、試る

表5 「送り仮名の付け方（1973）」通則別の正答率（%）

送り仮名の付け方		留学生	日本人学生	調査32語
通則1	本則	78.4	91.5	「失う」「快い」等12語
	例外(2)	52.9	82.8	「豊かな」1語
	例外(3)	21.6	49.5	「逆らう」1語
通則2	本則(1)	43.6	82.2	「果たす」「過ごす」等17語
	本則(2)	19.6	50.5	「確かめる」1語
全体平均		55.5	83.7	

井上（2003b）は、上掲の(2)「Ⅱ + 2型ストラテジー」を受けて、漢字の読みが2音節を担う4音節語の場合、送り仮名の正答率が高いことを指摘した上で、そうではなく、漢字の読みが1音節又は3音節を担う4音節語の場合は送り仮名を誤りやすいとみている。そして、井上（2003c）は、音節数に同訓異字、学習時期（時差訓）、語彙、使用頻度といった要因を加え、送り仮名の付け方の難易度分析を行っている。その後、井上（2005a）は、さらに語の音節数と漢字訓の音節数の比率に着目した研究を進めた結果、これを送り仮名の難易度規定要因の一つであると結論付けた。以上は、いずれも日本人学生（高校生・高専生）を対象とする送り仮名研究の成果である。

しかし、本稿では留学生を対象とするため、2拍長・1拍短（金田一 1988:128）、2モーラ・フット（遠藤 2011:88）のような日本語のリズムではなく、語を視覚的に捉え、漢字部分よりも送り仮名部分の音節数（文字数）に着目する。なぜなら、これには留学生の次のような送り仮名の誤答「×散る（ちらかる）」「×冷す（ひやかす）」「×勇い（いさましい）」、また「×失しなう」「×豊かなな」「×改ためる」等の存在がある^{注9}。もちろん、送り仮名法の一つとして、例えば、漢字の訓に1音節だけ担わせるもの（例「養しなう」「確しかめる」）や3音節以上の語は最後の1音節だけ送り仮名を送らせるもの（例「浴る（あびせる）」「必ず（かならず）」）も理論上は成り立つが、現状、送り仮名の付け方としては特異である。

そこで、以下、送り仮名の誤答における送り仮名部分の音節数の出現状況を把握するために、送り仮名の誤答を次の3分類として分析を進める（井上 2005a 参照）。語例の後の括弧内は略号である。送り仮名の誤答のうち、過少誤答をs、送り仮名の音節数を数字でs1、s2のように記す。過多誤答も同様にm2、m3、m4と記す。なお、送り仮名の誤答は3音節以上の語に出現するため、m1は存在しない。

- | | |
|------------------------------------|--------------------|
| A 増減可能語：送り仮名を正答よりも少なく又は多く送る可能性がある語 | 例：連ねる |
| ・過少誤答：送り仮名を正答よりも少なく送った誤答 | 例：連る（s1） |
| ・過多誤答：送り仮名を正答よりも多く送った誤答 | 例：連らねる（m3） |
| B 過少限定語：送り仮名を正答よりも少なく送ることしかできない語 | 例：冷ます |
| ・過少誤答：送り仮名を正答よりも少なく送った誤答 | 例：冷す（s1） |
| C 過多限定語：送り仮名を正答よりも多く送ることしかできない語 | 例：耕す |
| ・過多誤答：送り仮名を正答よりも多く送った誤答 | 例：耕やす（m2）、耕がやす（m3） |

さて、送り仮名調査における調査語に対する解答総数は1,632（32問・51人）で、正答数906、誤答数713、無答数13である。全誤答713のうち過少誤答は581（81.5%）、過多誤答は132（18.5%）であった。そして、過少誤答581のうち、送り仮名を1音節としたための誤答s1の総数392（67.5%）、2音節としたための誤答s2の総数189（32.5%）、過多誤答132のうち送り仮名を2音節としたための誤答m2の総数118（89.4%）、3音節としたための誤答m3の総数13（9.8%）、4音節としたための誤答m4の総数1（0.8%）であった。このように、全体的には過少誤答が圧倒的に多く、過少誤答では1音節を送った誤り、過多誤答では2音節を送った誤りが多い。これを、正答の音節数との比較でいえば、誤答の多くは過少誤答で1音節少なく送ったか、過多誤答では1音節多く送ったかであるといえる。

以下、上記の分類順にみると、Aの増減可能語は7語（勇ましい、確かめる、豊かな、改める、連なる、逆らう、比べる）である^{注10}。いま、その送り仮名の誤答がどのように出現しているかの状況を表6-1、送り仮名の正しい音節数と誤った音節数の差の状況を表6-2に示す。すると、過少誤答が大半であること、正答より1音節少ない過少誤答が大半であることが読み取れる。

表 6-1 (A) 送り仮名の誤答の出現状況

	s1	s2	計
過少誤答	92 (58.2%)	66 (41.8%)	158
	m1	m2	計
過多誤答	3 (75.0%)	1 (25.0%)	4

表 6-2 (A) 正答と誤答との送り仮名の音節数差

	1 音節差	2 音節差	計
過少誤答	154 (97.5%)	4 (2.5%)	158
過多誤答	7 (100.0%)	0 (0%)	7
計	161 (97.5%)	42.5 (%)	165

表 7-1 (B・C) 送り仮名の誤答の出現状況

	s1	s2	計
過少誤答	300 (70.9%)	123 (29.1%)	423
	m2	m3	計
過多誤答	118 (95.2%)	6 (4.8%)	124

表 7-2 (B・C) 正答と誤答との送り仮名の音節数差

	1 音節差	2 音節差	計
過少誤答	300 (70.9%)	123 (29.1%)	423
過多誤答	1 音節差	2 音節差	計
計	118 (95.2%)	6 (4.8%)	124

次に、B の過少限定語は 14 語、C の過多限定語は 11 語である^{注11}。それぞれの送り仮名の誤答の出現状況を表 7-1、正答と誤答における送り仮名の音節数差の状況を表 7-2 に示す。表 7-1 及び表 7-2 からは、まず、送り仮名の誤答の出現状況が正答と誤答の送り仮名の音節数差と一致していること、次に、過少誤答数が過多誤答数と比べて 3.5 倍近く多いこと、そして、正答の送り仮名の音節数に対して過少誤答、過多誤答ともに 1 音節差の誤答が多いこと等が分かる。

これまでの分析から、留学生の送り仮名の誤答における送り仮名の音節数について、(1)「正答よりも少なく送りやすい」、(2)「正答より少なく送る場合は 1 音節少なく、多く送る場合は 1 音節多くなりやすい」という傾向を指摘することができる^{注12}。(1)については、日本人学生を対象とした井上 (2005a) においても指摘され、考察が行われている。一方、(2)については送り仮名の誤答において s1、s2、m2 の出現率が高いことと関係することから、改めて全誤答におけるそれらの出現状況を整理して表 8 に示す。

表 8 によると、送り仮名を誤った結果としての出現形である s1 が半数以上であるため、誤りの送り仮名の音節数については、(3)「語の最後の 1 音節を送りやすい」を追加することができるだろう。なお、これについては井上 (2016) でも触れているが、小野寺・中村 (1981) が高校生の誤答分析から仮定、提示した誤りの音節数ストラテジーの「N+る型ストラテジー」と通じる可能性もある。また、(3)を受けて、留学生の送り仮名の誤りのストラテジーとして「N+1 型ストラテジー」(語末 1 音節方式、N: 漢字、1: 送り仮名の音節数) を想定することができる。この点を含め、次節では、留学生がどのように送り仮名を付けるのかといった送り仮名ストラテジー、送り仮名の生成メカニズムについて検討する。

表 8 送り仮名の誤答の出現状況

誤答の出現形	出現数
s1 : (過少誤答) 1 音節送っている	392 (55.0%)
s2 : (過少誤答) 2 音節送っている	189 (26.5%)
m2 : (過多誤答) 2 音節送っている	118 (16.6%)
m3 : (過多誤答) 3 音節送っている	13 (1.8%)
m4 : (過多誤答) 4 音節送っている	1 (0.1%)
計	713 (100%)

4. 3 留学生の送り仮名ストラテジー

留学生の送り仮名ストラテジーを検討する前に、日本人学生の場合をみておく。井上（2005b）は、日本人学生の送り仮名ストラテジーに関し、日本人高校生（1～3年生）686人を対象に送り仮名の付け方に迷った際、どのように対処するかを調査している。その結果を示した表9によると、①の「直観」方式を除くと、⑤の関連語を想起・比較する「類推」方式が30%強と最も多く、以下、②「活用語尾」方式、③「漢字訓2音節」方式が10%程度で続く。④「語末1音節」方式も5.5%ながらその存在が認められる。

そこで、今回、中国・台湾出身の留学生6人を対象に、(1) 告示「送り仮名の付け方」を知っているか、(2) 通常、送り仮名はどのように付けているか、そして、(3) 送り仮名調査の調査語32語のうち7語を「送り仮名（正誤表記）付き」の問題形式（例：「失なう（誤）」は正しいか）で提示し、解答及び判断理由について記述を求めるとともに、追加の聞き取り調査を行った。結果は、次の通りである。

- (1) 告示「送り仮名の付け方」の存在を知っている留学生は、大学の日本語の授業で学んだことがあるという1人だけで、他の5人は知らない。
- (2) 通常、送り仮名の付け方は、特に意識せず、日本語の授業や教科書で漢字と一緒に出てきたものを覚えた通りに付ける、忘れたり覚えていない語や分からない語、知らない語に対しては印象や感覚、勘で付ける。あるいは、似たような他の語の送り仮名を参考にする。例えば、「こころよい（快）」は、語末が「い」の「高い」「甘い」と同じように送り仮名を送る。
- (3) 調査で提示したのは、「失なう（誤）」「快よい（誤）」「過ごす（正）」「確める（誤）」「散らかる（正）」「浴せる（誤）」「勇ましい（正）」の7語である。例えば、正しい送り仮名の「過ごす」の場合、正解者の「勉強して知っている」「過ぎる⇔過ごすと覚えている」という回答に対し、不正解者からは「過す」の形で覚えているという回答があった。一方、誤った送り仮名の「浴せる」の場合、正解者からの「この語は勉強したことがない、知らない語だから直観で付けた」「浴びる⇔浴びせると覚えている」ので「浴せる」は誤りだという回答に対し、不正解者からは「あびる」は「浴る」と漢字の後に送り仮名1文字が付くから「浴（あび）」なので「浴せる」は正しい、といった記憶の誤りに基づき推測したことが明確に分かる回答があった。

表9 送り仮名の付け方に迷ったとき、どのようにするか（3つ以内で複数回答）

対処方式	回答	人数（％）
①直観	感覚的に、勘などで、送り仮名を付ける	56 (38.9%)
②活用語尾	活用語尾（助動詞ナイを付けその前）から送る。 例：書かーナイ、重くーナイ	163 (10.6%)
③漢字訓2音節	漢字に2音節を当て、残りを平仮名で送る。 例：歩（ある）く、静（しず）かだ	156 (10.2%)
④語末1音節	語の最後の1音節だけを送る。 例：走る、敬う	85 (5.5%)
⑤類推	関連する他の語を思い浮かべて比べて送る。 例：助（たす）ける ⇔ 助（たす）かる	497 (32.4%)
⑥その他	無答など	36 (5.4%)

以上の聞き取り調査からは、留学生の場合、表9の日本人高校生の送り仮名への対処方式のうち①、⑤の存在を確認できた一方、②、③、④の存否については確認できなかった。

そこで、次項以下、②の送り仮名調査の被調査者である留学生の知識にはないと思われる「送り仮名の付け方」の通則1に基づく「活用語尾方式」、③の日本人学生の送り仮名の付け方の特徴とされる「漢字訓2音節方式」を除き、④の語末の1音節だけを付ける「語末1音節方式」、また、表8で指摘した留学生の送り仮名は「語の最後の1音節を送りやすい」という傾向を含め、留学生が送り仮名が分からない、送り仮名に困った場合の送り仮名の付け方について聞き取り調査の回答を踏まえながら分析する。

4. 3. 1 直観方式

留学生への聞き取り調査の中で、改めて提示語「過ごす（正）」に注目すると、正解者は「過ごす」と覚えていてと回答し、不正解者は「過す」と覚えていると回答した。いずれも学習記憶に基づくという一般的な送り仮名の付け方である。前者は正しく記憶し、後者は誤って記憶していたのである。

留学生の送り仮名調査では、告示「送り仮名の付け方」通則1の本則「活用のある語（通則2を適用する語を除く。）は、活用語尾を送る」を正答としているため、「過す」は誤答扱いになる。なお、「過す」について補足すれば、この語は通則2の許容「読み間違えるおそれのない場合は、活用語尾以外の部分について、次の（ ）の中に示すように、送り仮名を省くことができる」語に該当し、送り仮名は通則2が適用されるのである。このため、不正解者は日本社会のどこかで「過す」を目にし、記憶している可能性がないわけではない。しかし、この「許容」は、例えば、図表等で文字数が限られている場合には有効であるが、通常は「過ごす」と表記するものである。このようなことから、送り仮名の記憶自体が誤っている場合はもちろん、上記のように記憶形（例：過す）が「送り仮名の付け方」の許容に該当する場合があります、個人的な文章等において使用された送り仮名の付け方の正誤判断には相応の注意が必要である。

次に注目されるのは、提示語「失なう（誤）」について正解と判断した留学生が、その理由を日本語の教科書で漢字「失」の上に「うしな」と振られた読み仮名（ルビ）が記憶に残っているからと回答した点である。これにより、漢字の読み仮名の記載は漢字自体の習得のみならず、語表記としての送り仮名を身に付ける上でも有効であることが分かる。一方、送り仮名を忘れたり、うろ覚えであったり、未習語のため送り仮名が分からない等で困った場合には、日本人高校生の場合と同様、印象や感覚、勘によって送り仮名を付けるという回答が複数あった。そこで、これを本稿では送り仮名ストラテジー段階以前の「直観方式」と呼ぶ。そして、以下では、対処方式のうちでも直観方式ではなく、送り仮名を付けるために意識的に用いられる一定の方式・方略を送り仮名ストラテジーと呼んで提案する。

4. 3. 2 過剰般化ストラテジー

提示語「快よい（誤）」の場合、正解と判断する理由として「日本語の形容詞は「漢字+い」の構成だから「い」を送る」という回答があった。この送り仮名ストラテジーは、告示「送り仮名の付け方」通則1の「本則」に部分的に該当する。しかし、厳密に言えば、通則1の「例外」(1)「語幹が「し」で終わる形容詞は、「し」から送る（例「著しい」「珍しい」）」、それから「例外」(2)「活用語尾の前に「か」「やか」「らか」を含む形容動詞はその音節から送る（例「暖かだ」「穏やかだ」「明らかだ」）」、さらに「例外」(3)「次の語は、次に示すように送る（例「明るい」「危ない」）」が上記の回答への反例として存在する。つまり、必ずしも「日本語の形容詞」のすべてが送り仮名として「い」を送るわけではない。

そこで、本稿では、この「日本語の形容詞は「漢字+い」の構成だから「い」を送る」のような「本則」

の中から部分的に抽出して一般化, 単純化^{注13}するような送り仮名ストラテジーを「過剰般化ストラテジー」と呼ぶ。過剰般化ストラテジーの例としては、他に次のようなものが考えられる。

①「しい」で終わる形容詞は「し」から送る。（通則1の「例外」(1)の不完全形）

②漢字の訓読み部分はいつも一定の音節数にして送る。

これらについては、そもそも告示「送り仮名の付け方」においては「本則」以外に「例外」又は「許容」が存在するため、上記①に対しては「勇ましい」「憎らしい」等が反例となる（通則2の(1)(2)）。また、②に対しても「脅かす（通則1の「例外」(3)）」「表す・表わす（通則1「許容」）」「終わる・終る（通則2「許容」）」等が反例となる。

4. 3. 3 経済性ストラテジー

一般的に、送り仮名は、読み手にとっては多いほうが誤読・難読を避けられるという点で読みやすく経済的である。一方、書き手にとっては既知語の表記であるため、少なく送るほうが1文字であっても書く負担が軽いという点で経済的といえる。留学生への聞き取り調査では、留学生は日本語で文や文章を書く機会が少ないため、日本語を書く際、送り仮名は少なく送るほうが楽だという回答があった。このような、できるだけ送り仮名を少なく送るストラテジーを本稿では「経済性ストラテジー」と呼ぶことにする。

これを「表わす」と「表す」「行なう」と「行う」の場合でみよう。すると、告示「送り仮名の付け方」通則1に基づけば「あらわす」「おこなう」の送り仮名は「表す」「行う」のように送る。しかし、通則1の「許容」においては「表わす」「行なう」と送ることができるとしている。実際、「表わす」「行なう」においては誤読・難読が生じないと思われるが、「表す」「行って」という表記の場合は「ヒョウス」「いって」という読みの可能性が生じる。しかし、書き手にとってはその語は既知であるため読みは一意であり、通常、その一意に従って送り仮名を少なく付けることが好まれる傾向は否めないということになる。

なお、内閣告示「送りがなのつけ方」（1959）の通則・第1・1では「動詞はその活用語尾を送る」として語例を示した後、「ただし、次の語は活用語尾の前の音節から送る」と続けて「表わす、行なう、脅かす、群がる、和らげる」等の語を示している。一方、その後、改定された告示「送り仮名の付け方」（1973）においては通則1で、それら但し書きの語例のうち「脅かす、群がる、和らげる」等は「例外」へ、「表わす、行なう」等は「許容」の語例へと変更している。いずれにせよ、送り仮名の付け方は、読み手の立場に配慮して語を読みやすく、誤読・難読を避けるという観点から多く送る方式を採用しているのである。しかし、告示「送り仮名の付け方」に関する知識が必ずしも十分でない留学生（又は日本人学生）にとっては、読み手の読みやすさを考慮する、誤読・難読を回避するという点よりも、専ら書き手の立場から1文字でも書く負担が軽減される「経済性」の観点が重視される。その結果、送り仮名を少なく送る送り仮名ストラテジー、すなわち、経済性ストラテジーが採用される傾向を生ずるものと考えられる。

4. 3. 4 音節数ストラテジー

井上（2005a）は、日本人学生対象の送り仮名調査を通して語の音節数と漢字の訓の音節数の関係に着目し、誤りやすい送り仮名の分析を行った^{注14}。これに対し、本稿では、留学生対象の送り仮名調査を通して、送り仮名の音節数に着目した「音節数ストラテジー」について分析を行う。

そこで、最初に、留学生と日本人学生（高専生）の送り仮名の音節数別に正答率を求めた結果を図1に示す。横軸には留学生と高専生別に正しい送り仮名の音節数が1音節（「失う」等11語）、2音節（「冷ます」等15語）、3音節（「冷やかす」等6語）の場合、縦軸にはそれぞれの正答率を表す。

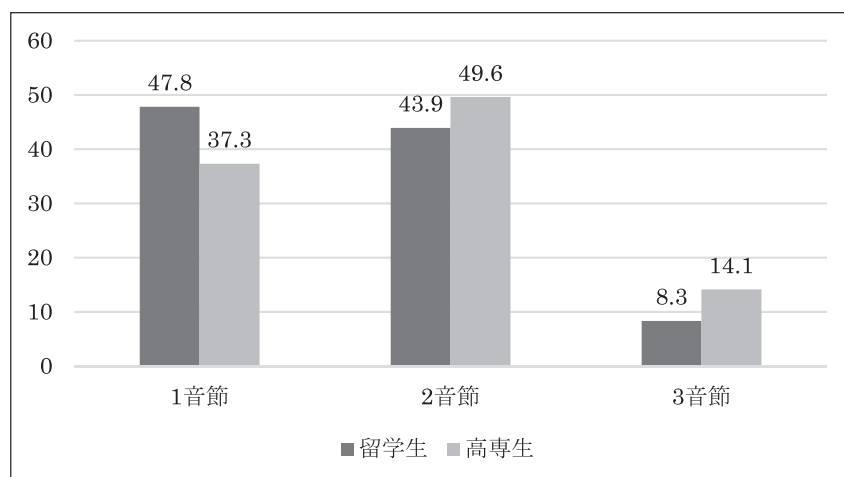


図1 送り仮名の音節数別の正答率 (%)

図1によれば、送り仮名が1音節の場合、留学生の正答率が47.8%、高専生が37.3%であり、留学生のほうが約10ポイント高い。これに対し、送り仮名が2音節の場合、留学生の正答率が43.9%、高専生が49.6%であり、高専生のほうが約6ポイント高くなる。送り仮名が3音節の場合も2音節の場合と同様、高専生のほうが約6ポイント高い。すなわち、送り仮名の音節数が1音節の語では留学生の送り仮名の正答率のほうが高く、2音節・3音節の語になると高専生の正答率のほうが高くなっている。すると、これは送り仮名の付け方の知識・能力についての仮説1「日本人学生のほうが留学生より優れている（井上2003a）」に一部、反することになる。このため、これを検証するため、表8（4.2）の分析でも想定された「N + 1型ストラテジー」（語末1音節方式）について分析を行う。なぜなら、仮に留学生がこのストラテジーを採用している場合、送り仮名の付け方の正しい知識・能力とは無関係に送り仮名が1音節の語の正答率が高まっているだけのことになるからである。

そこで、送り仮名調査において送り仮名が語末1音節であった解答について、次の比率を求めた。

- ① N + 1 送り仮名が語末1音節で表記された解答が全32問に占める比率
- ② S = 1 対象21問（全32問中、語末1音節が正解の送り仮名である11問を除く）において語末に送り仮名1音節を送った過少誤答s1が占める比率

表10に、①②がともに最も低い留学生51番のほか、①が60%以上、かつ②が40%以上の留学生9人の結果を示す。平均は留学生全体の平均を表す。表10によると、留学生の2人に1人は送り仮名を語末の1音節に付け、その結果、およそ3人に1人が誤答であることが分かる。また、25番～8番の9人には本人の意識や自覚とは別に「N + 1型ストラテジー」を採用している可能性がある。中でも、①の出現率が70%以上と高い13番～8番の6人はその採用可能性が高く、8番に至っては32語すべてが送り仮名1音節（①②とも100%）であることから「N + 1型ストラテジー」を採用しているものと認定される。

表10 送り仮名の語末1音節形と過少誤答1の出現率 (%)

	51	25	21	24	13	20	19	15	12	8	平均
① N + 1	37.5	62.5	68.8	65.6	71.9	75.0	75.0	78.1	87.5	100	50.1
② S = 1	4.8	42.9	52.4	52.4	66.7	61.9	61.9	66.7	81.0	100	36.6

以上から、例えば、表2（3.2.2）で「断る」の留学生の正答率が日本人学生を上回った理由について、次のように説明することができる。すなわち、「ことわる」の送り仮名は、日本人学生が「漢字2音節+送り仮名2音節」とする誤りの「Ⅱ+2型ストラテジー」により「断わる」のような誤答になる場合があるのに対し^{注15}、留学生の場合、誤りの「N+1型ストラテジー」により「断る」とした回答が結果的に正答となっている場合が含まれていると考えられる。

4. 3. 5 類推ストラテジー

留学生に告示「送り仮名の付け方」に関する知識がない場合や未習語の場合、聞き取り調査で得られた「他の語の書き方をもとに書く」という「類推ストラテジー」が有効に働くことがある。この送り仮名ストラテジーは、4.3で触れた「こころよい（快）」において他の形容詞「高い」「甘い」を思い浮かべ、それに倣って「快い」が正しいと判断するというものである。留学生の送り仮名調査では、確かに類推ストラテジーの採用により、結果的にはあるが正解となっている。しかし、聞き取り調査の回答者が思い浮かべた語が、仮に「珍しい」「冷たい」の場合は不正解になる。なぜなら、「快い」と「高い」「甘い」といったク活用形容詞に基づく送り仮名は告示「送り仮名の付け方」通則1「本則」の「活用のある語（通則2を適用する語を除く。）は、活用語尾を送る」に基づくものであるのに対し、「珍しい」や「冷たい」はいわゆるシク活用形容詞に基づく通則1の「例外」(1)や「次の語は、次に示すように送る」として提示された「例外」(3)の送り仮名だからである。また当然ながら、聞き取り調査の回答者が有する通則1に基づく類推ストラテジーは通則2の該当語（例：頼もしい）に対しては無効である^{注16}。一方、例えば、これが次の①②のような類推ストラテジーであるならば、正答率は向上するのではないと思われる。

- ① 自他対応語を参考にして付ける。

例：「混ざる」と「混じる」「混ぜる」, 「連なる」と「連ねる」（通則2「本則」(1)）

- ② 派生語を参考にして付ける。

例：「確かだ」から「たしかめる」は「確かめる」（通則2「本則」(2)）

これは、①の「混」「連」の訓がそれぞれ「ま」「つら」、②の「確」の訓が「たし」と一定に保つように送り仮名が付けられているため^{注17}、類推ストラテジーが有効に働き、送り仮名が正解するのである。一方、仮に「混る」「確める」のような送り仮名を付けた場合、漢字の訓の音節数が一定でないため、類推ストラテジーは機能せず、前者は「まじる／まざる」のような誤読、後者は難読を招きかねないことから、それらは不適切な、誤った送り仮名の付け方ということになる。

5. 誤った送り仮名の生成メカニズム

本章では前章で示した4種の送り仮名ストラテジーを踏まえ、留学生は誤った送り仮名をどのようにして付けるのか、その生成メカニズムについて検討する。なお、送り仮名の付け方が分からない、迷ったり困ったりした場合を扱うため、誤った学習記憶に基づく送り仮名の付け方は対象としない。

さて、問題となるのは、書き手である留学生が幾つの送り仮名ストラテジー、どのような送り仮名ストラテジーを有しているかである。それが単一であればそれによるしかない。しかし、複数を有する場合、有効性が高いストラテジーは、順に類推、過剰般化、経済性、音節数となるだろう。

特に、類推ストラテジーは告示「送り仮名の付け方」の通則を反映していることから、最も有効性が高いと考えられる。次に、告示「送り仮名の付け方」の一部を反映させている過剰般化ストラテジーが有効

ではないかと思われる。それから、送り仮名の付け方が問題となるのが3音節以上の語であるため、正しい送り仮名の音節数に対し1音節の増減（差）であれば、誤読・難読は一定の範囲で収まると考えられることから、経済性ストラテジーが続く。そして、有効性が最も低いのは、いわば経済性ストラテジーを極限化し、実質は送り仮名を1音節に固定する「N + 1型ストラテジー」（語末1音節方式）といえる音節数ストラテジーとなる。ちなみに、今回の送り仮名調査で「N + 1型ストラテジー」を採用していると認定された留学生⑧台湾11の場合、正答率34.4%（32問中、送り仮名1音節が正解の11問に正解）、得点は51人中43位であった。

なお、送り仮名ストラテジーではない直観方式の有効性の程度については明らかではないが、その正答率に関しては、送り仮名の誤答率に対する送り仮名付け方の難易度を判断する際に用いた「蓋然性難易指標（井上2005a）」がそれに相当するといえるだろう^{注18}。また、直観方式や送り仮名ストラテジーを採用しない場合、無答の一因になっているのではないかとと思われる。

以上のように、留学生の送り仮名ストラテジーは、類推ストラテジーを含めて、有効性の担保が少ないか、まったくないものであるため、いずれも「誤りの送り仮名ストラテジー」であるといえる。送り仮名の誤答は、そもそも書き手が正しい送り仮名の付け方の「よりどころ」を有しないことが起因となっており、独自の「誤りの送り仮名ストラテジー」によって個人的又は偶発的に生成されていると考えられる。そして、事実上、送り仮名調査における送り仮名の正答は告示「送り仮名の付け方」の中に存在するものであるため、留学生に限らず日本語の書き手はまずその存在を知り、内容を正しく理解する必要がある。つまり、送り仮名の付け方として単に技術を習得するのではなく、一つひとつの語の送り仮名を着実に身に付けるとともに、語・語彙としての意味、文法・語構成の理解と関連付けた送り仮名の付け方の学習過程、習得段階を踏む必要があるのである。

6. おわりに

本稿では、留学生の送り仮名調査を通して告示「送り仮名の付け方」に関する知識、能力の状況、留学生の送り仮名の付け方の実態を分析、考察した。そして、留学生の送り仮名の正答率が日本人学生の7割弱であること、中国や台湾出身の留学生の正答率が相対的に高いこと、送り仮名能力の個人差は日本語能力レベル（JLPT 認定級）と相関があること、告示「送り仮名の付け方」の通則別での正答率においては日本人学生と同様の傾向があることを示した。また、留学生の送り仮名の誤答分析を通して、告示「送り仮名の付け方」について知らない状態で、当該語の送り仮名の付け方に迷ったり困ったりした場合の対処法として直観方式のほか、過剰般化、経済性、音節数、類推といった誤りの送り仮名ストラテジー4種の存在を指摘するとともに、その生成メカニズムには日本人学生の場合と異なる留学生に特徴的な面があることを明らかにした。

今後、この成果を日本語教育における送り仮名指導にどのように活用するかが課題となる。その際、国語科教育において送り仮名を文法と関連付けた井上（2004）、また、留学生6人を対象に実施した送り仮名の付け方の聞き取り調査から窺われた送り仮名の付け方の実態が参考となるだろう。そして、送り仮名指導は、単に技術的な送り仮名の付け方にとどまるのではなく、告示「送り仮名の付け方」における単独の語、複合の語、活用のある語、活用のない語、派生・対応の関係を考慮し、送り仮名の付け方を語についての言語学な理解と関連付けた表記法の指導であることが求められる。

注記

1. 1973（昭和 48）年 6 月 18 日内閣告示 2 号「送り仮名の付け方」は、1959（昭和 34）年 7 月 11 日内閣訓令・告示の「送りがなのつけ方」を改定したものである。その後、「常用漢字表」の内閣告示、改定との関係から、1981（昭和 56）年 10 月 1 日内閣告示第 3 号、2010（平成 22）年 11 月 30 日内閣告示第 3 号によってそれぞれ一部改正された。告示「送り仮名の付け方」の構成は次の通りである。

単独の語

1 活用のある語

通則 1（活用語尾を送る語に関するもの）

通則 2（派生・対応の関係を考慮して、活用語尾の前の部分から送る語に関するもの）

2 活用のない語

通則 3（名詞であって、送り仮名を付けない語に関するもの）

通則 4（活用のある語から転じた名詞であって、もとの語の送り仮名の付け方によって送る語に関するもの）

通則 5（副詞・連体詞・接続詞に関するもの）

複合の語

通則 6（単独の語の送り仮名の付け方による語に関するもの）

通則 7（慣用に従って送り仮名を付けない語に関するもの）

付表の語

1（送り仮名を付ける語に関するもの）

2（送り仮名を付けない語に関するもの）

2. ここでは、日本人学生と留学生に共通する A「日本人学生・留学生ともに易しい」送り仮名の付け方の語についての分析は省略する。
3. 日本語学会『日本語学辞典』東京堂出版、2018 年。
4. 国語科教育における送り仮名指導でも、送り仮名は文や文章の中で送り仮名を正しく送ることを指導しており、その誤りは訂正する程度である。なお、日本漢字能力検定（「漢検」）は、8 級（小学校 3 年生修了程度）から 2 級（高校卒業・大学・一般程度）まで「送り仮名」問題を出題している。
5. 同じ調査を 2005 年 5 月から 7 月にかけて国立小山工業高等専門学校 3 年生 93 人を対象に実施している。両者について *t* 検定を行ったところ、平均点の差に有意差はみられなかった。
6. 個人差の要因としては、出身、日本語能力のほかに、年齢、日本語学習歴、日本滞在年数、表記能力等が挙げられる。
7. 調査語は井上（2005a）で用いた 32 語。そのうち、表 5 の「通則 1」本則の該当語は「失う、喜ぶ、退く、戦う、志す、耕す、争う、快い、比べる、養う、導く、断る」の 12 語、「通則 2」本則(1)の該当語は「冷やかす、目覚ましい、勇ましい、浴びせる、散らかる、冷ます、混じる、満ちる、絶やす、改める、連なる、慣らす、照らす、満たす、過ごす、果たす、変わる」の 17 語。
8. 小野寺・中村（1981）は、誤答の音節数ストラテジーは予備調査段階のものであり、(2)の全例が(1)にも該当し、(1)「浴る」と(3)「消る」は相互に該当するといった関係があると述べている。また、小学 5 年生では、(1)「Ⅱ + n 型ストラテジー」又は(2)「Ⅱ + 2 型ストラテジー」が自成的に形成されているという。その根拠として、教育漢字中、動詞として単独に使用されるものの訓読みの延べ数約 530 語の中で、送り仮名の付け方に関して選択の余地のない 2 音節語（例：切る）が約 100 語あり、それ以外の約 430 語の中で漢字訓 1 音節を

当てているもの（例：変わる）が約 140 語，3 音節以上を当てているもの（例：整う，志す）が約 50 語に対し，2 音節を当てているもの（例：走る）が約 240 語と 430 語中の過半数を占めることを挙げている。この点，動詞の使用頻度や他の形容詞，形容動詞についても調査の必要があるだろうが，大勢は変わらないようにも思われる。(3)「N+る型ストラテジー」については学年が上がり，高校生になるとみられる誤りのストラテジーとするが，その適否は今後の研究課題であるとしている。

9. 井上 (2005a) における日本人学生にも過少誤答「散かる」「冷かす」「勇しい」，過多誤答「失なう」「豊かなな」「改ためる」等が出現するが，留学生の場合，過少誤答における送り仮名数は日本人学生と比べいっそう少なく思われる。
10. A 増減可能語 7 のうち，「勇ましい，確かめる」の 2 語には s1, s2, m4 の 3 通りの出現可能性，「連なる」等の 5 語には s1, m3 の 2 通りの出現可能性がある。
11. B 過少限定語 14 のうち，「冷やかす，目覚ましい，浴びせる，散らかる」の 4 語には s1, s2 の 2 通りの出現可能性があるが，「冷ます」等の 10 語は s1 の 1 通りの可能性だけである。また，C 過多限定語 11 のうち，「快い」には m2, m3, m4 の 3 通り，「失う」等の 10 語には m2, m3 の 2 通りの出現可能性がある。
12. 今後の調査では，調査語数を増すとともに，分類 A～C 内でそれぞれの出現可能性を考慮した語数調整を行うことが望まれる。
13. 複雑さを統合したり省略したり，正確さよりも分かりやすさを優先して簡略化する意。
14. 送り仮名の付け方は，語の音節数が 3 又は 4 に対し漢字訓の音節数が 2 の場合に易しい傾向が認められる。また，語の音節数が 5 以上，漢字訓の音節数が 3 又は 4 の場合に難しい傾向があること等を指摘している。
15. 「ことわる」の送り仮名は，通常，「断る」であるが，告示「送り仮名の付け方」の活用のある語の通則 1 の許容では「断わる」と活用語尾の前の音節から送ることができるとする。許容の語は，他に「表す（表わす）」「行う（行なう）」等がある。本稿では，日本語教育における送り仮名指導の観点からこの許容を適用せず，本則に基づく「断る」のみを正答として扱っている。
16. このような「類推」は，「送り仮名の付け方」の通則の本則が適用される範囲の語であるならば有効である。しかし，例えば，単独の語のうち通則 1～5 にはいずれの本則に対しても例外又は許容があるため，「類推」の有効範囲には限界がある。
17. 武部 (1981:75-76) は「送り仮名そのものは，どのようなまとめ方をしても，例外を設けなければ処理できない性質のものである」とする一方，「送り仮名の付け方」の検討を通して次の 2 つの法則を提示している。
 - (1) 活用語は，その漢字の受け持つ部分の読み方を一定に保つように送り仮名を付ける。
 - (2) 派生語は，その漢字の受け持つ部分の読み方を一定に保つように送り仮名を付ける。
18. n 音節語には $(n - 1)$ 通りの送り仮名の付け方 ($n \geq 2$: 整数) がある。このため，送り仮名の誤答率: x ，蓋然性難易指標: $y = \{1 / (n - 1)\} \times 100$ とするとき， $x > y$ の場合，その送り仮名の付け方は明らかに難しいと判断される。

引用文献

- 小野寺淑行・中村元子（1981）「送り仮名の付け方の誤りにみられる音節数ストラテジー」『熊本大学教育学部紀要 人文科学』30
- 武部良明（1981）『日本語表記法の課題』三省堂
- 小泉保（1993）『日本語教師のための言語学入門』大修館書店
- 金田一春彦（1988）『日本語新版（上）』岩波新書
- 石田敏子（2000）『改訂新版 日本語教授法』大修館書店
- 井上次夫（2003a）「留学生と日本人の送り仮名」日本語教育学会第11回研究集会発表資料，東北大学（『日本語教育』121号，要旨 p.154）
- 井上次夫（2003b）「誤りやすい送り仮名」『漢字教育研究』4，日本漢字能力検定協会
- 井上次夫（2003c）「「送り仮名の付け方」から見た漢字の難易度」『105回大会発表要旨集』，全国大学国語教育学会
- 井上次夫（2004）「学校文法と「送り仮名の付け方」」『日本の文法教育』Ⅱ，平成14－16年度科研費基盤研究C(1)「日本語教科教育文法の改善に関する基礎的研究」（課題番号14510444）平成15年度中間報告書
- 井上次夫（2005a）「「送り仮名の付け方」の難易度－モーラ数から見た難しさの傾向－」『奈良教育大学国文－研究と教育－』28
- 井上次夫（2005b）「送り仮名能力と送り仮名意識」『漢字教育研究』6，日本漢字能力検定協会
- 東海大学留学生センター（2005）『日本語教育法概論』東海大学出版会
- 遠藤織江（2011）『日本語教育を学ぶ』三修社
- 柳田しのぶ（2013）「初級漢字クラスにおける送り仮名タスクの一案」『JSL 漢字学習研究会誌』5
- 井上次夫（2016）「留学生の「送り仮名の付け方」の特徴－送り仮名調査の誤答分析から－」日本語教育学会第6回研究集会発表資料，高知大学
- 学校図書（2021）『小学校国語3年上』

参考文献【発行・発表年順】

- 中根淑（1876）『日本文典』森屋治兵衛
- 倉野憲司（1943）「送り仮名について」『国語と国文学』20－6
- 総理庁・文部省（1949）『公文用語の手びき 改訂版』印刷局
- 大野弥穂子・水谷静夫（1952）「現代かなまじり文の源流」『言語生活』6
- 国立国語研究所（1952）資料集3『送り仮名法資料集』※【送り仮名対照表】には以下が収められている。
- 内閣官報局「送仮名法」1889・中根淑「送仮名大概」1895・佐藤仁之助「新撰送仮字法」1899・国語調査委員会「送仮名法」1907・内田百閒「動詞の不変化語尾について」1935・服部嘉香「正しい使い方 仮名遣と送り仮名」1936・木枝増一「送仮名法」1938・三宅正太郎・若林方雄・野田信夫「送り仮名法（案）」1939・文部省国語調査室「送りがなのつけ方（案）」1946・文部省著作教科書「中等国語」の送り仮名・総理庁・文部省「公文用語の手びき」1949・文部省「表記の基準」1950
- 安倍能成（1954）「送り仮名と句讀點」『心』7-3，平凡社
- 大野弥穂子（1958）「送りがなの諸問題」『言語生活』80
- 松尾 拾（1958）「送りがなの基準」『言語生活』80

- 八木徹夫・松尾拾・斎賀秀夫（1958）「中学生の送りがな一都内四中学校の調査から」『言語生活』80
- 内閣告示（1959）『送りがなのつけ方』
- 倉野憲司（1959）「再び送り仮名について」『文芸と思想』18
- 斎賀秀夫（1959）「高松市における送りがなの調査」『言語生活』89
- 精文館編集所（1959）『新・送りがな便覧』精文館
- 藤井継男・百瀬他（1959）「新送りがなを巡って（座談会）」『言語生活』89
- 松井四郎（1959）「送りがなの指導について（小学校篇）」『言語生活』89
- 松尾拾・斎賀秀夫・水谷修・市川孝（1959）「国語審議会の『送りがなのつけ方』」『言語生活』89
- 水谷静夫（1959）「国語審議会『送りがなのつけ方』の分析」『国語学』36
- 八木徹夫（1959）「中学校における送りがなの指導」『言語生活』89
- 白石大二（1960）『当用漢字・現代かなづかい・送りがなのつけ方』大蔵省印刷局
- 三宅武郎（1962）『おくりがな法資料集』明治書院
- 藤井継男（1964）『「送りがなのつけ方」を再検討する』『言語生活』152
- 広田栄太郎他（1965）『文章表現辞典』東京堂出版
- 川上静子（1966）「送りがなの研究—漱石・藤村の作品について—」『立教大学日本文学』16
- 丸山林平（1966）「送りがな法」『静岡英和女学院短期大学紀要』1
- 築島裕（1970）「現代語の正書法について—『当用漢字改定音訓表』及び『改定送りがなのつけ方』を中心に」『言語生活』228
- 土屋信一（1970）「送りがなの『ゆれ』を考える」『言語生活』228
- 岡田正世（1971）『「当用漢字改定音訓表（案）」と『改定送りがなのつけ方（案）』について』福井大学『国語国文学』15
- 国立国語研究所（1971）研究報告40「送りがな意識の調査」秀英出版
- 真下三郎（1971）「送りがな法について」『甲南女子大学研究紀要』7
- 石川久男（1972）「中学校における送りがな指導」『言語生活』252
- 内閣告示（1973）『送り仮名の付け方』
- 加藤彰彦（1973）「新『送り仮名の付け方』と日本語教育」『日本語教育』21
- 林 大（1973）「学校教育における「当用漢字音訓表」及び『送り仮名の付け方』の取り扱いについて」『文部時報』1155
- 関宮市（1974）「改定された『送り仮名の付け方』について」『鶴見大学紀要』11
- 藤原宏（1974）『「学校教育における」新音訓・送り仮名必携』明治図書
- 前田正道（1974）「法令における表記の基準について—法令における当用漢字の音訓使用及び送り仮名の付け方—」『時の法令』847
- 西沢秀雄（1975）『改訂新旧かなづかい送り仮名辞典』岩崎美術社
- 林 大（1975）「かなづかい・音訓・送り仮名」『言語』4-9
- 林巨樹（1977）「現代仮名づかいと送り仮名」『日本語3（国語国字問題）』岩波書店
- 内閣告示（1981）『送り仮名の付け方』一部改正
- 武部良明（1981）「送り仮名の問題点」『講座日本語教育』17
- 白石大二（1982）『常用漢字／送り仮名／筆順／例解辞典』ぎょうせい
- 武部良明（1982）「読みやすさから見た表記史」『講座日本語学』6, 明治書院

- 原田種成（1982）『漢字の常識』三省堂
- 島田昌彦（1984）「難産だった送り仮名の付け方」『日本語の再生』桜風社
- 瀬戸仁（1988）「送り仮名の指導」『漢字講座』12, 明治書院
- 安部清哉（1989）「常用漢字の送り仮名」『漢字講座』11, 明治書院
- 原口裕（1989）「近代の送り仮名」『漢字講座』4, 明治書院
- 島田昌彦（1992）「日本語教育における送り仮名の付け方」『金沢大学留学生教育センター紀要』1
- 川口義一他（1995）『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』創拓社
- 文化庁（1995）『言葉に関する問答集 総集編』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所（1997）『現代雑誌九十種の用語用字全語彙・表記【FD版】』三省堂
- 久保田篤（1998）「明治初期の送り仮名」『成蹊大学文学部紀要』33
- 小林一仁（1998）『バツをつけない漢字指導』大修館書店
- 棚橋尚子（1998）「小学校における漢字教育の現状と問題点」『日本語学』17 - 5
- 児島邦宏（1999）『小学校学習指導要領』時事通信社
- 野村雅昭（1999）「『送り仮名の付け方』の意味するもの」『月刊しにか』10 - 7
- 廣岡理栄（1999）「送り仮名の変化」『国文学解釈と鑑賞』64-7
- 文部省（1999）『高等学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版社
- 川本信幹（2000）「日本語力現状レポート第4回」『日本語学』19 - 2
- 井上次夫（2001）「正答率・誤答率・無答率からみる漢字の難易度」『漢字教育研究』2, 日本漢字能力検定協会
- 川本信幹（2002）「日本語力現状レポート第31回」『日本語学』21 - 10
- 山東功（2002）「明治期送り仮名法制定経緯について」『女子大文学国文篇』53
- 大隈秀夫（2003）『分かりやすい日本語の書き方』講談社現代新書
- 戸塚拓也（2006）「現代における送り仮名標記の実態」『信大国語教育』16
- 井上次夫（2007）「送り仮名の誤答分析：誤答例を用いた送り仮名指導に向けて」『小山工業高等専門学校研究紀要』39
- 内閣告示（2010）『送り仮名の付け方』一部改正
- 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版
- 屋名池誠（2017）「「ありえたもう一つの道」から明治以来の送り仮名法の性格を考える」『日本語学』36-12

謝辞

留学生の「送り仮名の付け方」調査の実施に際しては、高知大学国際連携推進センターの大塚薫氏より多大なご協力をいただきました。ここに記し、心より感謝申し上げます。

また、査読者の方には懇篤なご教示をいただきました。深く感謝の意を表します。

(資料 1-1) 留学生の「送り仮名調査」S - P 表 (実線 : S 曲線)

(凡例) 1 : 正答 0 : 無答 s1 : 送り仮名 1 音節の過少誤答 m2 : 送り仮名 2 音節の過多誤答

		調 査 語 番 号																																		
		12	9	27	16	1	19	29	28	31	11	32	10	13	23	15	17	20	14	8	18	24	25	4	3	22	26	30	7	21	6	2	5	得点	順位	
50	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s1	s2	1	s2	29	1	
51	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s2	s2	1	s2	29	2
46	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	m2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s2	s1	1	s2	s2	27	3	
47	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	m2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s2	s1	1	s2	s2	27	4	
48	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s2	s1	1	s2	1	1	27	5
49	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s2	s2	1	1	1	s2	1	1	s2	s2	27	6	
45	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	m2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s1	1	1	1	s1	s1	1	s1	1	1	s2	26	7
42	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s1	s1	s1	1	s2	s2	25	8	
43	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	m2	1	1	1	1	1	1	1	s1	1	s2	1	1	s1	1	1	s2	s2	25	9	
44	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	m2	1	1	1	1	1	1	1	s2	s2	1	s1	1	1	1	s2	s2	s2	25	10	
38	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s1	1	1	1	s1	s1	s2	s1	s2	s2	23	11	
39	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s2	s2	s1	1	s1	s2	s1	1	s1	s2	23	12	
40	1	1	1	s1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	m2	1	1	1	1	s1	1	1	1	s1	1	s2	1	1	1	s2	1	s2	s1	s2	23	13
41	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s1	m2	1	m2	1	s1	1	1	1	1	s2	1	s1	1	1	s2	s1	1	1	s2	23	14
36	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	s1	s1	1	1	s1	s2	1	s1	1	s1	s2	s1	s2	s2	21	15	
37	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	m2	s1	1	1	1	1	1	1	s2	s2	s1	1	s1	s1	s1	s2	s2	s2	21	16	
32	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	m2	1	1	1	1	s1	s1	s1	s1	s2	s2	1	s1	s1	1	s						

(凡例) 1 : 正答 0 : 無答 s1 : 送り仮名 1 音節の過少誤答 m2 : 送り仮名 2 音節の過多誤答

